

# 韓国の「多文化小説」研究 —韓国社会の多文化化と小説表象をめぐって— A study on Korean "multicultural novel": Multiculturalization of Korean society and representation in novels

吉良 佳奈江

KIRA KANAE

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

*Quadrante*, No.21 (2019), pp. 289-301.

## 目次

はじめに

1. 「多文化小説」とは何か
2. 韓国の多文化的状況と「多文化小説」
  - 2-1. 同化を期待される結婚移住女性
  - 2-2. 新たな労働者を描く労働小説
  - 2-3. 「多文化小説」に描かれる／を描く北韓離脱民たち
  - 2-4. エスニックマイノリティーとしての朝鮮族
- おわりに

## はじめに

本稿は韓国において 2000 年以降に多く発表された「多文化小説」と呼ばれる小説群について論じるものである。「多文化小説」と呼ばれ、論じられている作品の多くは、韓国内に居住している外国人を登場人物として、韓国の社会と移住外国人との関係を主題としている。

「多文化小説」の舞台は、1990 年代以降多くの外国人が流入し、多文化化が進む韓国の社会である。その背景には、韓国の経済成長がもたらしたふたつの問題、「女性配偶者の不足」と「労働者不足」がある。産業化によって都市部に多くの人口が流入すると、地方の農漁村に残された男性たちは結婚相手を探すのが難しくなった。長男が結婚し、子供をもうけ、家を継がなければならないという儒教的な価値観が強く残る韓国では、未婚の

男性が業者を介して海外から結婚相手を迎えるケースが増えた。初期には同じ言葉のできる中国の朝鮮族、その後は韓国よりも経済発展が遅れている東南アジアや中央アジアの女性たちが韓国人男性の結婚相手として韓国に流入した。また経済成長によって労働力が不足し、さらに国内の労働力が 3D (Dirty, Dangerous, Difficult) と呼ばれる製造業、建設業、漁業、農畜産業などを忌避する傾向がある中で、農業、建設現場、製造業の中では特に家具工場などで、外国人の労働者が増加した。こうして韓国に移住した外国人は、家父長制の強く残る地方の家庭の主婦として、過酷な労働現場の労働者として、つまり社会における弱者として韓国社会に編入されることになった。

韓国の多文化政策に関しては、韓国語、日本語による多くの先行研究がある。「多文化小説」に関しても韓国では李京在 (2015) 『多文化時代の韓国小説を読む』<sup>1</sup>、イ・ミリム (2015) 『21 世紀韓国小説の多文化と異邦人たち』<sup>2</sup>をはじめ様々な研究がなされている。

本稿では先行研究を整理したうえで、韓国の多文化状況と小説を対照することで「多文化小説」の概観を試みる。

## 1. 「多文化小説」とは何か

「多文化小説」と呼ばれる作品は、2003 年に文

<sup>1</sup> 이경재, 2015, 『다문화시대의 한국소설 읽기』  
소명출판

以下本文中で著者や作品名の日本語訳が紹介されている

文献に関しては注では、韓国語での書誌情報のみを記す

<sup>2</sup> 이미림, 2015, 『21 世紀韓国小説의 多文化와 異邦人들』 푸른사상



芸誌『文学手帳』に発表されたイ・スンウォンの「ごめんなさい、ホーおじさん」<sup>3</sup>、2004年から『文学トンネ』に連載されたチョン・ウニョンの『さよなら、サーカス』<sup>4</sup>などをはじめとして、2000年代から2010年代の初めにかけて多くの作品が発表されている。

これらの創作を受けて批評の面でも論議が交わされた。主な文芸誌では、『文学トンネ』2006年冬号の「道の上の人生—移動、脱出、遊牧」<sup>5</sup>、『ノモ』2007年冬号の「韓国の中の外国／外国人」<sup>6</sup>などの特集が組まれている。批評の内容は「多文化小説」の限界を指摘したものや「多文化小説」韓国社会の現実と小説の内容を比較したものだけでなく、移住外国人の登場する映画から彼らの表象を読み解くものまで多岐にわたる。

批評に続き学術研究の場で「多文化小説」研究もなされてきた。文学研究の論文タイトルとして「多文化小説」<sup>7</sup>という言葉が使われたのは、ソン・ミョンヒ(2011)「多文化小説において再現される結婚移住女性—コン・ソノク『カリボン恋歌』を中心に—」<sup>8</sup>である。多文化小説研究に関しては、作品を絞って検討する作品論、結婚移住女性や外国人労働者、朝鮮族など移住外国人の属性別に類型化する試み、多文化小説全般からさまざまな類型化を試みる研究に分類できる。

まず、一つの作品を取り上げ集中的に検討する作品論としては、ソン・ヒョンホが『『象』に見る移住談話の人文的研究』(2009)<sup>9</sup>をはじめ、「イムギハンター」<sup>10</sup>、「さよなら、サーカス」<sup>11</sup>、「カリボン羊串」<sup>12</sup>などの短編を対象に作品研究を行

っている。また、チャン・ミョン(2010)は『さよなら、サーカス』を、海外に在住する韓国人を扱った文学と同じくディアスポラ文学として分析し、「ディアスポラ文学とトランスナショナリズム」を発表している。また、属性別の類型化としては、カン・ジング(2011)「韓国小説にみられる結婚移住女性の再現様相」<sup>13</sup>、キム・セリョン(2012)「2000年代韓国以降韓国小説に再現された朝鮮民族移住民」<sup>14</sup>などがある。そして、多文化小説全般の類型化としては、登場人物たちを分類したソン・フェボク(2010)の「韓国多文化小説の三つの人物類型研究」<sup>15</sup>、教育の立場から多文化小説の意義を考察するイ・ギョンスン(2011)の「多文化時代の小説(文学)教育の一方法」<sup>16</sup>、移住外国人がどのような動機によって韓国に来るのかという点から類型化を試み、その移住の動機を家族と金という二つの欲望に類型化したオ・ユンホ(2009)の「ディアスポラプロット—2000年代小説に形象化される多文化社会の外国人移住者」<sup>17</sup>などがある。オ・ユンホはこのなかで「外国人労働者の生活を『貧しさ』と結びつけることで、彼らの、疎外され歪曲された生活が、批判的問題意識ではなく、憐憫と同情を引き起こす」ことを指摘している。これらの論文の中で特に「多文化小説」とは何かを定義しているわけではない。金泰勲(2015)は国内に在住する外国人の増加により、韓国社会でも「多文化社会(multicultural society)」、「多文化家族(multicultural family)」という言葉が用いられるようになったことを指摘している<sup>18</sup>。「多文化小説」という言葉もその延長線上にあり、当時の韓国で

<sup>3</sup> 이순원, 2003, 「미안해요, 호 아저씨」 『문학수첩』 2003년 가을호

<sup>4</sup> 천운영, 2005, 『잘 가라, 서커스』 문학동네, 2005

<sup>5</sup> 황호덕, 서동진, 정여울, 복도훈, 2006, 「길위의 인생, 이동, 탈출, 유목」 『문학동네』 겨울호:418-500.

<sup>6</sup> 이찬, 황영미, 김남일, 2007 「한국 속의 외국/외국인」 『너머』 겨울호:12-51

<sup>7</sup> 韓国で発表された論文のタイトルでは「多文化小説」のように「」をつけて示す。

<sup>8</sup> 송명희, 2011, 「다문화 소설 속에 재현된 혼이주여성: 공선옥의 「가리봉 연가」를 중심으로」 『한어문교육』, 35, 한국언어문학교육학회:133-153

<sup>9</sup> 송현호, 2009, 「『코끼리』에 나타난 이주 담론의 인문학적 연구」 『현대소설연구』 42:229-252.

<sup>10</sup> 송현호, 2010, 「『이무기 사냥꾼』에 나타난 이주

담론의 인문학적 연구」 『한중인문학연구』 21:21-42.

<sup>11</sup> 송현호, 2010, 「『잘 가라 서커스』에 나타난 이주 담론의 인문학적 연구」 『현대소설연구』 45:239-262.

<sup>12</sup> 송현호, 2012, 「가리봉 양꼬치에 나타난 이주 담론의 인문학적 연구」 『현대소설연구』 51:349-372

<sup>13</sup> 강진구, 2011, 「한국소설의 나타난 결혼이주여성의 재현 양상」 『다문화콘텐츠연구』

<sup>14</sup> 김세령, 2012, 「2000년대 이후 한국 소설에 재현된 조선족 이주민」 『우리문학연구』 37:425-462

<sup>15</sup> 송희복, 2010, 「한국 다문화 소설의 세 가지 인물 유형 연구」 『배달말』 47:309-420.

<sup>16</sup> 이경순, 2011, 「다문화 시대 소설(문학) 교육의 한 방법」 『문학교육』 36:378-420.

<sup>17</sup> 오윤호, 2009, 「다아스포라 플롯—2000년대 소설에 형상화된 다문화사회의 외국인 이주자」 『사회와 언어학』 17:231-249.

<sup>18</sup> 金泰勲, 2015, 「韓国における「多文化家族」の児童生

は「多文化小説」が韓国に在住する移住者たちを主題とした文学作品と類推することは容易だったと思われる<sup>19</sup>。

チェ・ナムゴン(2014)は、「2000年代韓国多文化小説研究——移住民の再現様相と文学的志向性を中心として——」<sup>20</sup>の中で韓国の「多文化小説」を「韓国に新たな構成員として流入してきた移住労働者、結婚移住女性、脱北者、混血者、留学生、専門職員など、定住民に対応する移住民を対象として、韓国を叙事空間に設定して再現する」、あるいは「韓国外の空間で移住者として生きていく韓国人を形象化した叙事文学を総称する」と定義したうえで、「ただし研究の意義を明白にするため移住労働者、結婚移住女性、脱北者、混血者など4つの範疇の人物を設定した作品を分析の対象テキストとして使用した」としている。実際にこれまでの「多文化小説」研究は前者に対するものが中心である。

## 2. 韓国の多文化状況と「多文化小説」

韓国における国境を超えた人々の移動は大きく二期に分けられ、経済成長にともない移民送出国から受け入れ国へと急激な転換を遂げたことが特徴である。

第一期は外国へ移民を送り出していた1960年から1980年代中盤までである。外貨獲得と国内の雇用不足解消のため、大規模な移民の派遣が行われた。1960年代に当時の西ドイツへ男性は炭鉱夫、女性は看護婦として派遣されたのを皮切りに、1960年代後半にはベトナムへ軍人と労働者の派遣、1970年代には中東の産油国の都市建設・インフラ

整備への派遣が行なわれた。また、1960年代から1980年代の中盤にかけて持続的に外国船舶への従業が続いた。これらの派遣は、毎年数千人単位で規模が大きく、いずれも募集から送り出し、現地での管理まで政府が一貫して主幹することが特徴である。送り出し事業を目的として、1965年には韓国海外開発公社が作られたが、1980年代の後半より海外移住が減少すると、公社は1991年に終了した。

第二期は、移住労働者が流入する1980年後半以降である。現在、韓国の多文化政策の対象として大きく分類されるのは、結婚移住女性と移住労働者<sup>21</sup>、および北韓離脱民である<sup>22</sup>。韓国政府は、移住外国人に対してそれぞれ異なった管轄から法を整備し、異なった政策を打ち出している。結婚移住女性には、国籍による統合を目標に、社会統合プログラムを受けるよう準備されている。移住労働者は管理・統制を目的として雇用許可制が適用されているが、未登録移住労働者つまり不法在留者は排除の対象となっており、彼らを対象とした取り締まりが行われている。北韓離脱民は保護と同時に監視の対象者となっている。

中国との国交開始による朝鮮族の韓国への流入、1991年の産業研修制度、2004年の雇用許可制の導入と、結婚移住女性の増加により外国人数は増加の一途をたどっている。韓国に居住する外国人は1997年には38万人だったが2000年には100万人を超え、2017年の時点で218万人を超えている。20年で5倍以上に増加し、韓国の全人口約5,144万人に対して約4%を占めている<sup>23</sup>。

現在、韓国における移住外国人をめぐるのは

徒に対する教育施策——韓国語教育施策を中心に——』『比較文化史研究』16:1-14.

<sup>19</sup> ただし、カナダやオーストラリアにおけるmulticulturalism(多文化主義)という言葉が、先住民や国外出身者の権利や文化を認め、これを尊重する意味で用いられるのに対し、韓国の「多文化政策」の中心は移住外国人に韓国の言葉や文化を教えるものであり、実質的には同化政策だという矛盾がある。そのような状況で一定の作品群を「多文化小説」と名付けてよいのか、そもそも「多文化小説」とは何かという定義については議論が尽くされたとは言えないと考える。

<sup>20</sup> 韓国外国語大学大学院、国語国文科、博士論文。

<sup>21</sup> 就労を目的として韓国に滞在する外国人は、高級人材と呼ばれる専門職と新興国出身の非熟練労働人材に分けられるが、ここでは後者について論じる。

<sup>22</sup> 本稿では華僑については扱わない。川本綾は「現在の韓国の多文化政策は、移住外国人の定住支援を打ち出しているものの、唯一の旧来定住者である華僑の地位向上に関しては消極的で、華僑は次々と整備される社会統合のための法制度の対象にすらなっていない」ことを指摘している。

川本綾, 2013, 「韓国の多文化政策と在韓華僑——仁川チャイナタウン構想を事例に」『移民政策研究』5: 65-81.

<sup>23</sup> 韓国統計庁 HP より(最終アクセス 2019年1月20日)

在留外国人数及び不法滞在者数

[http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx\\_cd=2756](http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx_cd=2756)

総人口

<http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx>

様々な問題がある。1990年代から韓国には様々な形で滞在する外国人が増えはじめ、それにやや遅れて2000年代に入ってから発表されはじめた「多文化小説」は、移住外国人の問題を小説として再現することで韓国社会に告発してきた。では、移住外国人をめぐる問題は作品の中にどのように反映されているのだろうか。イ・ミリムは「2000年代多文化小説に見る移住労働者の再現様相」(2012)<sup>24</sup>で、移住労働者を主題にした作品を対象に、「移住労働者は身体的な暴力、言葉の暴力、監禁、脅迫、給与の遅配、劣悪な労働環境と居住環境などで身体を毀損されたり、女性の場合は性的に対象化されるが、混種生と多文化社会の可能性を提案もしている」として、登場人物と作品の内容に一定の相関性があることを指摘している。ここでは、韓国に滞在する外国人を韓国に入学する経緯から結婚移住女性、移住労働者、北韓離脱民に分類する。さらにこの3つの分類では整理しきれない、「多文化小説」に描かれたエスニシティとして、中国朝鮮族を取り上げ、それぞれの現状と作品を対照することで「多文化小説」の概観を試みたい。

## 2-1. 同化を期待される結婚移住女性

韓国社会の工業化に伴って若い人口が都市に集中するようになると韓国社会の低出産、高齢化が深刻化した。地方の農漁村で家庭を持って家を継ぐことを期待された男性たちは、結婚相手を海外に求めるようになった。「多文化小説」に描かれる結婚移住女性は、業者を介して結婚が困難な韓国の男性と結婚して韓国に入学する低開発国出身の

女性が大部分である。業者を通じての国際結婚の対象は、1990年以降、始めは基本的に同じ文字を使い方はあっても意思の疎通に困難のない言葉の通じる中国朝鮮族女性から始まった。その後仲介業者の活躍もあって結婚移住女性の出身国はフィリピン、タイ、モンゴル、ベトナムへと拡大している。

韓国政府は、結婚移住女性は韓国で家庭を築いて永住するという考えのもとに、韓国社会への適応を目的とした社会福祉政策を行っている。現在結婚移住者の就業には法的な制限はなく、2年居住することで簡易帰化の申請ができる。また、離婚後に子供を養育している場合や、家庭内暴力など韓国配偶者に帰責事由がある場合は、別居していても在留資格が維持できる<sup>25</sup>。また、生活の支援としては「韓国語や基礎生活の教育など地域社会適応教育プログラムの運営や、請願・苦情相談体制の整備、生活支援、緊急救護体系の構築も推進されており、韓国語学習教室や生活相談、医療支援など具体的な支援施策が実行されて」<sup>26</sup>おり、特に語学教育に関しては教育放送局であるEBSで「結婚移住者のための韓国語」<sup>27</sup>というテレビ番組が、中国語、ベトナム語、ロシア語の各国語で毎週放送されている<sup>28</sup>。

馬兪貞(2009)は、日本と韓国の農村における国際結婚を「農村の結婚できない男性が経済力の低い国の女性を、斡旋業者に紹介してもらう形の結婚」<sup>29</sup>と定義したうえで、韓国ではその問題点として結婚に至るまでの業者を介した結婚が人身売買的な性格を帯びていること、結婚後夫や姑から妻

\_cd=2756

<sup>24</sup> 이미림, 2012, 「2000년대 다문화소설에 나타난 이주노동자 재현양상」『우리문학연구』35:317-372.

<sup>25</sup> 吉川美華, 2015, 「韓国における出入国管理法関連法令の改正と移民外国人の在留資格 — 中国・CSI同胞と結婚移民者を中心に —」『アジア文化研究所研究年報』50:125-104.

<sup>26</sup> 天野明子・安藤淑子, 2011, 「韓国における在住外国人施策の現状と課題」『山梨国際研究』6:115-70.

<sup>27</sup> 多文化家庭子女に対する教育については、日本では次の論文が発表されている。

呉世蓮, 2012, 「多文化教育の視点からとらえた社会教育の取り組み — 韓国の「国境のない村」の事例を中心に —」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』20: 57-65. 李修京・石井淳一・廣瀬龍, 2015, 「多文化共生社会化と教育事情考察 — 日韓の多文化共生社会の事情と日本の

ヘイトスピーチ現象の台頭 —」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』66: 64-47

金泰勲(2015)「韓国における「多文化家族」の児童生徒に対する教育施策 — 韓国語教育施策を中心に —」『比較文化史研究』16: 1-14.

<sup>28</sup> <http://home.ebs.co.kr/home5894/main> (2019年3月現在) テレビの韓国語講座としては、非母語話者全般を対象にした「한국어 쉬워요 (韓国語 簡単です)」があり、また韓国語能力検定試験の対策講座も放送されている。これらの番組の放送日は決まっているが、再放送やインターネットを通じて実質的にいつでも見ることができる。

<sup>29</sup> 馬兪貞, 2009 「日本と韓国の農村における国際結婚 — 実態と原因、問題点を中心に比較・分析 —」『立命館国際関係論集』9: 161.

への身体的・言語的・性的な暴力が認められ、離婚の増加や妻の自殺などの問題があることを述べ、その原因として「日本も韓国も相手の言語や文化を認めず、一方的に日本や韓国の言語教育、文化教育なども行い、同化させようとする不平等性」<sup>30</sup>があることを指摘している。

結婚移住女性を扱った作品としては 2003 年に発表されたイ・スンウォンの「ごめんなさい、ホーおじさん」を皮切りに、千雲寧『さよなら、サーカス』、ジョン・インの「他人との時間」<sup>31</sup>キム・エラン「そこに夜 ここに歌」(『文学と社会』2009 年春号)<sup>32</sup>、ペク・カフム (2010)「プイーでもツイーでも」(『現代文学』2010 年 8 月号)<sup>33</sup>をはじめ多数の作品が発表されている。

海外へ行き、現地で複数の若い女性の中から結婚相手を選ぶ、いわゆるお見合い遠征の様相については、『さよなら、サーカス』、「プイーでもツイーでも」に、韓国の男性が実際に海外に渡りお見合いをして配偶者候補を選ぶ過程が描かれている。「ごめんなさい、ホーおじさん」では、話者である「私」が、第三者として外国から結婚相手を迎え入れる現象を語っている。「私」はソウル近郊でベトナム女性との国際結婚を勧める業者の横断幕を目にし、その後同窓会に参加するために故郷にもどり、過疎化と女性配偶者不足、実際にベトナム人女性と結婚するという友人たちと話しながら業者を介した国際結婚に思いを巡らす。農村の女性配偶者不足が深刻化した韓国において、1990 年以降、発展途上にある外国で結婚相手の女性を探すブームが中国の朝鮮族に始まり、東南アジアの女性たちへと拡大していく過程を概観しながら、一部の韓国人の抱いていたであろう罪悪感を描いている。「私」の後輩であるオイギは、都会から田舎へ連れてきた最初の妻に逃げられ、中国の延辺か

ら来た次の妻には騙され、45 歳にして 3 度目の結婚相手を探しにベトナムへ行くという。故郷の村で、再び『初婚・再婚、ベトナム娘と結婚なさい。障碍者、お年を召した方、絶対逃げ出しません!』という横断幕を目にした「私」は、「それを出す人も、眺める人も、聞く人も、この土地の誰一人として例外なく、ひとつの価値の下に形成してきた集団的な卑劣さに他ならない」と感じる。「私」は金を介した不釣り合いな結婚に「卑劣さ」を感じ、ベトナムの少女に出会う夢を見る。しかし結婚相手を金で買うような卑劣な結婚に対する申し訳なさを表明する相手がわからない。故ホー・チ・ミン主席に向けた謝罪の言葉、「ごめんなさい、ホーおじさん」がそのままタイトルになっている<sup>34</sup>。

現在、韓国では「多文化家族」という言葉は夫婦のどちらかが国外出身者である家庭を指す。金賢美 (2014) はこの「多文化家族」という呼び方について「多文化家族への支援政策であるにもかかわらず、この政策の展開過程で多文化家族を韓国社会の脆弱階層と命名する文化的暴力が起こりうる」ことを指摘している<sup>35</sup>。

「ごめんなさい、ホーおじさん」の中では、最初の見合いで 500 万ウォン、途中で 400 万ウォン、女性を連れてくるときに 300 万<sup>36</sup>ウォンという、金額が提示されている。買い物のように女性を選ぶ結婚の話に一番積極的に聞き入っているのは「私」の同級生のソンヒである。彼女には、小児麻痺で松葉杖が必要な未婚の弟がいる。業者を介して外国人女性と結婚するのは、国内では結婚に不利な条件を持つ韓国人男性たちであり、「多文化小説」において外国人女性との結婚を選択するのは身体的・精神的に障害を持つ男性である場合が多い。『さよならサーカス』でも、朝鮮族のリム・ヘファと結婚するインホは子供のころの事故のため

<sup>30</sup> 馬兪貞, 2009: 179.

<sup>31</sup> 정인, 2009, 「타인과의 시간」 『그 여자 사는 곳』, 문학수첩

<sup>32</sup> 김애란, 2009, 「그곳에 밤 여기에 노래」 『문학과 사회』 봄호

<sup>33</sup> 백가흠, 2010, 「뿌이거나 이거나」 『현대문학』 8 (=2014, 장정화, 역, 『Puy, Thuy, Whatever』 도서출판 아시아, 英韓バイリンガルバージョン)

<sup>34</sup> 1999 年にハンギョレ新聞社によってベトナム戦争における韓国軍の良民虐殺が韓国で報道されると、韓国ではベトナムに対する謝罪のための様々なキャンペーンが行

われた。そこでは「ごめんなさい、ベトナム」という歌も披露されている。これらのキャンペーンは、「ごめんなさい、ホーおじさん」のタイトルにも関係があると思われるので、今後の研究課題としたい。

<sup>35</sup> 金賢美著、羅一等訳、2014, 『『社会的再生産』の危機と韓国家族の多層化』平田由紀江・小島優生編『韓国家族—グローバル化と「伝統主義」のせめぎあいの中で』亜紀書房: 26.

<sup>36</sup> 500 万ウォンは日本の 50 万円に相当する。

に正常な声を出せない障害者である。チャン・ミヨン(2010)はインホのことを「健康ではない兄、つまり身体的欠陥のために国内の結婚市場では競争力を持ってない兄」としている<sup>37</sup>。ジョン・インの「他人との時間」では、業者を介した結婚ではなく、韓国人男性の片思いから始まるベトナム人女性との恋愛結婚が描かれる。この結婚に対して男性の家族が「確かに結婚は遅くなったが、だからと言って、他民族の、特に皮膚の浅黒い東南アジアの血が混ざるとは何事か。そんな結婚などは嫁を見つけられない田舎でやることで、大学で講義までしている人が、どうしてベトナム女性を結婚相手に迎えるのか」<sup>38</sup>と反対する。このことから、自由な恋愛結婚であっても「韓国人男性とベトナム人女性との国際結婚」を韓国社会で劣った男性が選択するものとする社会の偏見が読み取れる。

鄭智我の「血筋」(『統一文学』2008年下半期号)<sup>39</sup>は、息子に外国人の配偶者をもらい、一家の跡継ぎを産んでもらおうと奮闘する父親の姿を中心に語られる。外国人女性との結婚が個人の問題ではなく、家門を継ぐべき家族レベルの問題であることがよくわかる作品である。名門李氏は、田舎で農業をしているせいで息子が結婚できないことを「次の代に続くように故郷に縛り付けておいたものを、まさにそのせいで家門が途切れることになるのは否めない現実だった。行ってみれば自分の手で数百年の家門の歴史をすっぱりと絶ってしまったのだ」<sup>40</sup>と嘆く。外国人女性との結婚の多い全羅南道で、周りにも外国人女性と結婚するケースは多く、また妻にも勧められて、四十を過ぎた息子のために外国から結婚相手を探すことにする。初めは中国の朝鮮族と見合いをするが結婚詐欺にあい、次に結婚したタイ人は怠惰で息子の配偶者として、一家の嫁としてふさわしくないと判断して毎日無理やり畑仕事をさせたあげく、息子がいない間に金と離婚届、飛行機の切符を渡し帰国させてしまう。その次に結婚したフィリピン人

の女性は都会で商売をやりたいから援助してほしいと言い出したので「都会に出せるものなら、最初から送り出して韓国人の娘を嫁にもらったものを」<sup>41</sup>と、また離婚届と飛行機の切符、さらに田畑を売って工面した金を渡して帰国させる。四人目に選んだベトナム人の女性は、美人ではないが農家の出身で畑仕事に精を出し、韓国料理も韓国語も覚えようと努力して、息子にも妻にも愛されている。妻は、故郷が恋しすぎて故郷の話さえしない彼女が不憫だと泣き、見よう見まねでベトナム料理を作ってやるほどだ。ある日、産気づいた嫁を病院に担ぎ込んだ彼は、生まれてきた跡取りの孫の浅黒い肌の色を見てただひとり戸惑う。

ここには、韓国人の夫とその家族が外国人配偶者に対して、跡取りを産むことと、韓国への同化を期待していることが滑稽なほどに強調されている。また、結婚だけでなく、離婚まで金で解決するところには、外国人配偶者を人間としてではなく商品として消費しようとする態度が表れている。最後に結婚したベトナム人女性のスアンと妻の間では、初めて人間同士の交流がなされる。一家の家長である「私」は結婚の当事者である息子の気持ちすら考えず、すべては家門のためと理性的に行動してきたが、浅黒い肌で生まれてきた孫に対する戸惑いには、ぬぐい切れない偏見が読み取れる。

結婚移住女性との性行為は子孫を残すための結婚という側面から当然視されるが、その結果本人の同意を得ない夫婦間の性暴力が起これ、女性が性的に搾取される描写も多い。千雲寧の長編小説『さよならサーカス』では、中国へ結婚相手を探しに行く旅行の場面から物語が始まる。結婚によって韓国に来た朝鮮族の女性リム・ヘファは、自分の弟と関係を疑う夫の猜疑心によって毎晩針金で手を縛られ軟禁される。夫による虐待から突発的に家を飛び出し、朝鮮族のコミュニティに入るが結末は悲劇的である。

<sup>37</sup> 장미영, 2010, 「디아스포라문학과 트랜즈내서너리즘—천운영 長編小説『잘가라 서커스』를 중심으로」 『비평문학』 38:447.

<sup>38</sup> 정인, 2009, 「타인과의 시간」 単行本『그 여자 사는 곳』 문학수집: 83.

「多文化小説」の作品に関しては、できるだけ発表時の雑誌掲載情報を明示したが、引用に際して初出雑誌が確

認できないものに関しては単行本のページ数を記し、その旨を明示する。

<sup>39</sup> 정지아, 2008, 「핏줄」 『통일문학』 하반기

<sup>40</sup> 정지아, 2013 「핏줄」 単行本『금의 대화』, 은행나무: 160.

<sup>41</sup> 同上: 165.

ペク・カフムの「プイーでもツイーでも」は、地方で酪農を営む初老の男性、始宗氏が業者によるお見合いツアーで若いベトナム女性のツイーと結婚する。姑は肌が浅黒く、子供のように小柄でしゃしゃな嫁を認めず、家族は発音しにくいからという理由で彼女の名前さえ正しく呼ぼうとしない。兄はコミュニケーションも不十分なまま妻の体だけを求めるが、「始宗氏が性交に執着するのにはそれなりの理由があった。ツイーにつぎ込んだ金のためだった。何もしないで布団に入ると心がそわそわとした。ツイーをただ放っておくのは、なぜか何か損をするような感じがした」<sup>42</sup>からである。業者を通じ金銭を介する結婚の形態と合わせて、移住女性を対象化、商品化されていることが強調される。

ツイーは、一度はこの家を抜け出すが、連れ戻された後は兄弟二人でツイーの体を共有し、逃げ出さないように部屋に監禁する。しかし監禁しているだけではもったいないと考えて、仕事をさせるために部屋から出した日にツイーは首をつって自殺してしまう。しかし、遺灰を山に撒いた後、次の結婚相手を探す話を嬉しそうに交わす二人の描写からは、結婚相手が金さえ払えば交換可能な商品であるという考え方が読み取れる。

結婚移住女性を扱った作品は虐げられた女性の姿を描き、韓国社会の残酷さを浮き出させる作品が多いが、悲劇的な話ばかりではない。自由の少ない結婚生活の中でも、韓国で出会った軍人へのかすかな恋心から自分らしく生きようとする決意する若い結婚移住女性の姿を描くソ・ソンランの「パプリカ」(『韓国文学』2007年冬号)<sup>43</sup>や、若い嫁を貰ったと喜んでいたら、実は彼女はすでに母国で結婚していて従弟と偽って夫を連れてきて

いたことに気づいてしまう夫の姿を滑稽に描くイ・シベクの「犬の値」<sup>44</sup>のような作品もある。

結婚移住女性を扱う作品群では、業者を介した結婚により商品化され、性的に搾取される女性の姿だけでなく、移住女性とその子供たちを受け入れていく韓国社会と、韓国社会で生きていこうとする女性たちの姿が描かれている。

## 2-2. 新たな労働者を描く労働小説

韓国では工業化に伴う労働力不足を補う形で、始めは少数の不法就労者<sup>45</sup>、その後1991年からは産業研修生制度、2004年からは雇用許可制度によって移住労働者を受け入れている。外国人を「労働者」として雇用する雇用許可制度は2003年に制定、2004年から実施されている。これは韓国人を雇用することが難しい企業が、雇用労働部から雇用許可書の発給を受けて合法的に外国人を雇用できる制度で、韓国政府と移住労働者の送り出し国が国家間の相互協約を結び、人材を流入させる政策である。<sup>46</sup>これは、雇用する側の企業に許可を与えるものだが、韓国人の優先雇用を原則とするため、移住労働者は韓国人労働者が敬遠する第一次産業や建築業、家具製造などの中小企業に受け入れられることになった。雇用許可制は、単純技能労働者に対して韓国への移民ではなく、一定期間韓国で働いたのちに帰国する循環型の滞在を目標としているが、当初は原則1年契約、最長3年まで延長可能だったものが、現在では移住労働者と事業主の合意により最長9年8か月までの在留が可能になった<sup>47</sup>。キム・テファン(2015)は、韓国への移住を前提に同化政策がとられる結婚移住女性とは違い、移住労働者は一定期間韓国で就業したのちに帰国するものと考えられ、排除政策がと

<sup>42</sup> 백가흠, 2010, 「뿌이거나 이거나」 『현대문학』 8:p. 96.

<sup>43</sup> 서성란, 2007, 「파프리카」 『한국문학』 겨울호

<sup>44</sup> 이시백, 2008 「개 값」 『누가 말을 죽였을까』, 삶이 보이는 창

<sup>45</sup> キム・テファンは『多文化社会 韓国移民政策の理解』で、不法就労者について韓国政府は正式には認めていないが、産業研修生制度が実施される前に10万人程度流入していたとされ、彼らは旅行ビザや家族訪問ビザで入国後、帰国しないで韓国で就労を続けたことを報告している。김태환, 2015, 『다문화사회 한국 이민정책의 이해』 집사재,

<sup>46</sup> 2013年時点で送り出し国は、中国、フィリピン、カン

ボジア、ベトナム、ネパール、ミャンマー、モンゴル、タイ、インドネシア、パキスタン、ウズベキスタン、東ティモール、キルギスタン、スリランカ、バングラデシュの15か国である。キム・テファン(2015) p. 173.

<sup>47</sup> ハ・ガブレ(2011)は「外国人雇用許可制の変遷と課題」で滞在期間の延長は不法滞在の要因を減らすという点で評価できるが、労働者と事業主との関係が不平等であること、また、滞在期間の長期化に伴い、家族と離れて暮らすことが人間らしい暮らしを侵害するものだと指摘している。

하갑래, 2011, 「외국인고용 허가제의 변천과 과제」 『노동법논총』 22:361.



られていることを指摘している。特に移住労働者の労働災害が後を絶たないことについて「言語疎通の困難さと、慣れない労働現場、安全よりも利益のために仕事に急き立てる現実、特に移住初期の労働者たちには徹底した安全教育と情報支援などが担保されないことで、相次ぐ不幸な事故を防ぐことができない」としている<sup>48</sup>。

これまで雇用許可制のもとでの在留期間が延長されてきたにも関わらず、韓国内の不法滞在者は減少しておらず、2015年現在で21万名を超えているとみられる<sup>49</sup>。キム・ファンハク(2013)は「不法 滞在者の雇用関係に対する統制<sup>50</sup>」で不法滞在者の雇用関係においては、人権侵害はもちろん産業災害や疾病、犯罪の際に社会のセキュリティネットが作動しない恐れがあること、雇用主は不法な利益を上げ、納税や社会保険などの公的な負担を避けようとしているにもかかわらず、これに対する制裁がないこと、不法在留者本人も、摘発された際に刑事罰が行われずに強制出国になるだけであり、自発的な帰還を促す動因もないため不法滞在の問題について効果的に対応することができないことを指摘している。移住労働者をめぐっては、正規の滞在者であっても給与水準の低さ、長時間勤務や劣悪な労働環境が問題となっているが、さらに不法滞在者は不当な条件下でも声を上げられないことから災害や疾病、犯罪などに際して公的な保障がないのが現状である。不法滞在者は、文字通り法の外の存在であり、彼らに対する援助は主に NGO などに任されているのが実態である。

移住労働者を扱った作品としては金在營「象」(『創作と批評』2004年冬号)<sup>51</sup>、ソン・ホンギョ「イムギハンター」(『文学トネ』2005年夏号)<sup>52</sup>、パク・ボムシンの『ナマステ』(2005)<sup>53</sup>、日本

語の翻訳もある<sup>キムヨンス</sup>金衍洙の「皆に幸せな新年」(『現代文学』2007年1月号)<sup>54</sup>、英訳のあるイ・ギョン「埃の星」(『アジア』2009年秋号)<sup>55</sup>などがある。

「多文化小説」の中でも、移住労働者は特に貧しさと結びつけて描かれる。彼らは開発の遅れた母国での貧しさから逃れるために韓国に出稼ぎに来るが、低賃金の単純労働に従事するため韓国でも貧しさから逃れられないことが強調される。確かに、経済的に逼迫し、韓国社会に閉塞感を抱く若者にとっては貧しい移住労働者は、同情し共感する対象となりえるだろう。

「多文化小説」としては初期の作品で、極端な排除・孤立の様相を描いた作品に金在營の「象」がある。話者のアカスは10歳の少年で、ネパール人の父親とともに豚の畜舎として使われていた建物に住んでいる。母親は朝鮮族だが当時の韓国にはネパール大使館がなかったため、結婚届が出せず、アカスには戸籍も国籍もなく、母親も家を出てしまっている。同じ建物には、ミャンマー、バングラデシュ、パキスタン、ロシアから来た人たちが、韓国社会から排除されながら暮らしている。アカスは父親と同じ移住労働者たちが工場の事故で指を落とすたびに、その指を庭の片隅の「指のお墓」に埋めている。父親の指紋は労働のために擦り切れてしまい、韓国人からは「やい、こいつ、あるいはチクショウこの野郎という名前」<sup>56</sup>で呼ばれている。アカスは韓国人と同じ白い肌になりたいくて、漂白剤を解いた水で顔を洗い続け、顔が赤くなってしまう。このエピソードは、黒い肌が韓国社会で決して受け入れられないことを強調する。アカス少年は人権的な配慮から小学校に通っているが、そこでも不条理な差別と暴力を受ける<sup>57</sup>。『お前、ソヨンの隣の席だろ。この汚いガキが!』(……)

<sup>48</sup> 김태환, 2015: 219.

<sup>49</sup> 不法滞在者数は、在留期間を過ぎた者のうち在留期間延長を受けず、出国しない者が集計されるが、2002年の30万8千人をピークに、雇用許可制が決定された2003年には半数の15万4千人に減少したのち2007年には22万3千人まで増加し、その後20万人前後で推移していたが、2017年には再び25万人まで増加を見せている。韓国統計庁 HP より(最終アクセス2019年2月23日)在留外国人数及び現況

[http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx\\_cd=2756](http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx_cd=2756)

<sup>50</sup> 김환학, 2013, 「불법채류자의 고용관계에 대한

통제」『行政法研究』35: 83.

<sup>51</sup> 김재영, 2004「코끼리」『창작과 비평』겨울호

<sup>52</sup> 송홍규, 2005, 「이무기 사냥꾼」『문학동네』여름호

<sup>53</sup> 박범신, 2005, 『나마스테』한겨레신문사.

<sup>54</sup> 김연수, 2007, 「모두에게 복된 새해」『현대문학』1(=2011, きむふな訳『皆に幸せな新年・ケイケイの名前を呼んでみた(韓国現代文学選集)』トランスビュー)

<sup>55</sup> 이경, 2009, 「먼지별」『아시아』가을호(=2014, 전미세리, 역, 『Dust Star』, 도서출판 아시아, (英韓バイリンガルバージョン)

<sup>56</sup> 김재영, 2004「코끼리」『창작과 비평』겨울호: 194.

<sup>57</sup> 不法滞在の移住労働者の子供は、2003年の教育法改正



そういうと、糞の臭いのする手でどうしてソヨンに触るのかと詰め寄ってきた。僕はそんなことはしたことないと言った。転がっていく鉛筆を取ろうとして、間違っただけだと自分でもうんざりするほど、きちんきちんと説明した。ソヨンの兄さんが、嘘つくなこの野郎！と言って、げんこつが飛んできた<sup>58</sup>。」と、不条理な差別と暴力を受けている。この暴力に、アカス自身は次こそ殴り返すと息巻くが、父親はそれを止める。ここでは、不法滞在者という人権が認められない不安定な生活がいつ終わるかわからないということ自体が苦痛として描かれる。唯一、同僚の葬式の日にも仕事をし、吝嗇ぶりから軽蔑されて黄色いヤツ<sup>59</sup>と呼ばれているインド人労働者が帰国すると言い出すエピソードが出てくる。「黄色いヤツは両手いっぱい土産の袋を提げていた。彼は明日になれば、故国に帰るのだと口のはしに泡を浮かべて、楽しそうに浮かれまくっていた。この村に住んでいて、金をためて帰国するという人を見るのは初めてだ<sup>60</sup>。」しかしその夜、黄色いヤツが同じ村に住むビジェおじさんに襲われ、金を奪われる場面を少年は目撃する。母国に帰ることで不法滞在という不安定な状況は終わる。しかし、不法滞在の仲間から軽蔑されてまでも貯めた金がなくては異国で苦労した意味がない。黄色いヤツの帰国の困難さは、移住労働者の苦痛に終わりがいいことを象徴するエピソードである。どうやって抜け出すことができるのか全く分からないまま、韓国での苦しい生活に耐えている父親の姿は、ネパールの神話に登場する父親の姿に例えられる。この作品には、指紋が擦り切れてなくなるような劣悪な労働環境と保証されない健康、韓国人からの差別といった、移住労働者の受ける苦痛が描かれている。厳しい労働で指紋が消えるエピソードや、工場で切り落とされた「指のお墓」をアカスが作るエピソードは、1980年代に活躍した労働詩人、

朴□解の詩を彷彿とさせる。

ソン・ホンギョの「イムギハンター」の主人公ヨンテは、韓国人社会に受け入れられず外国人労働者たちとともに働いている。自分の妹と結婚したと言われて、村人たちから無視され、虐待されている父親<sup>61</sup>は、伝説上の生き物であるイムギを捕まえると言って池に入り、網を引く。村人から無視され殴られながら生きていた父親と、工場で働くアリは、どちらもヨンテの股間からつまみ出された毛じらみのように、死んだふりが上手だ。アリが受け取れなかった未回収の賃金を受け取るために死んだふりをしたことがきっかけで、死んだふりを武器にして金を稼ぐようになる。韓国人社会からはみ出したヨンテが生活する移住労働者の社会は、人間らしさが保障されていない。アリは不法入国で労働者として働いていて、韓国では最初から人権を認められていない存在であり、自分の働いた正当な賃金も払ってもらえない。中国朝鮮族の労働者ジャンは、虫垂炎による腹痛を痛み止めでごまかしているうちに腹膜炎からあっけなく死んでしまう。これらのエピソードからは、不法滞在となった労働者が健康や労働に関する最低限の保障も受けられていない状況が描かれる。前述の「象」の父親の消えてしまった指紋も、「イムギハンター」のアリの死んだふりも、韓国社会が彼らの人間性を認めないことの象徴といえるだろう。

キム・ミウォルの「中国語授業」(『韓国文学』2009年秋号)<sup>62</sup>は、仁川にある大学付属の語学学校で韓国語教師として働くスーの目から見た、中国出身の学生の姿が語られる。学生たちは留学ビザを交付されるが、その実態は不法労働を目的とした出稼ぎである。教え子のツォオンは、かつての恋人だったモンナが嫁いだ家に忍び込んだとして、逮捕され、不法労働がばれて強制送還になる。強制送還を前に、また韓国に戻ってくるという学

によって学校教育が受けられるようになっており、「満7歳から12歳の外国人不法滞在者の子どもは区役所で出入国事実証明書のみ発給され、近くの小学校に提出すれば入学し、終了後には正式の卒業証明書を取得することができる」ことになっている。

呉世蓮, 2012, 「多文化教育の視点からとらえた社会教育の取り組み—韓国の「国境のない村」の事例を中心に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20号-1

<sup>58</sup> 김재영, 2004 「코끼리」 『창작과 비평』 겨울호: 194.

<sup>59</sup> 原文では노랑이 (ノレンイ)。直訳では黄色いヤツだが、韓国語では主に黄褐色の毛色の犬を指す言葉。また、犬に関する言葉は侮辱語であることが多い。

<sup>60</sup> 김재영, 2004 「코끼리」 『창작과 비평』 겨울호: 206

<sup>61</sup> 実際に結婚したのは祖父がパルチザンの友人から預かった娘で、近親相姦ではない。韓国社会では、パルチザンにつながる出自がそれだけ禁忌されていたことを示唆する。

<sup>62</sup> 김미월, 2009, 「중국어수업」 『한국문학』 겨울호

生に、スーは次のように胸の中で語り掛ける。「あなたが次に韓国に来たときには、何倍にも膨れ上がった借金と、他人の子供の母親になっているモンナしか残っていないはずよ<sup>63</sup>」と、彼らの韓国留学と労働が、業者と韓国の社会に搾取されていることを伝えようとする。だから二度と韓国に来てはいけなと伝えるスーにしても、契約職の韓国語講師としてソウルから電車に乗って仁川まで通う先の見えない生活である。不安定で、経済的にも決して豊かでない自分の立場から、同じく不安定で貧しい教え子を理解しようとし、共感しようとする。

イ・ギョンの「埃の星」でも、貧しい韓国人から貧しい外国人へ同情を寄せるという同じ構図が見て取れる。16歳の「私」は、工場地帯で移住労働者に体を売りながら暮らしている。金に目がくらんだ母親のせいで父親が亡くなり、母親は「私」の世話をする気もない。空腹のためにパンを盗もうとして店主にばれ、パンの対価として暴行されたことが売春を始めたきっかけである。このエピソードからは、資本主義のために家族を失い、資本がなければ体を売るというルールを押し付けられた、いわば資本主義の被害者である「私」像が浮かび上がる。「私」は、唯一ズボンを下ろさずに3万ウォンをくれたチマに、「3万ウォン分、一応何かはしてあげなくちゃならない<sup>64</sup>」と考えながら、寝床のない日に泊めてもらう関係だ。チマはパキスタンで大学を卒業したものの就職先がなく、韓国に出稼ぎに来た。工場で働いているときに怪我をするが、けがに対する保障はなく、怪我の後遺症で十分に働けなくなると工場を追い出される<sup>65</sup>。その後はいくつかの職場を転々とし、月給もちゃんと受け取れずにととう家も追い出されて寝るところもなくなってしまう。「私」が知るチマの韓国生活は他の小説で語られる移住労働者の悲劇と大差がない。しかも「金を出せば何でも手に入り、

何か手に入れようと思えば金を出さなければならぬ」という原則は、ジャンケンのようなものだ。ジャンケンを知らない人相手に、ジャンケンができないように、金だけ出してぼんやりと何もほしがない彼に、私は何をしてあげればよいかしばらく思いつかなかった<sup>66</sup>」という言葉に象徴されるように、チマは食べ物も性交渉も金銭的な対価と引き換えにする資本主義社会に適応できない人間として描かれる。孤独で貧しい「私」は、チマに対して、愛情とも違う連帯を感じており、3万ウォンという恩を返そうと思っているが、それはすべて一方的なものとして描かれる。結局、パン屋に盗みに入ったのがばれたチマは屋上から飛び降りるという悲劇的な結末が描かれる。

移住労働者を描く作品群には、労働現場の過酷さ、移住労働者を搾取する韓国の社会構造の告発とともに資本主義社会への批判が読み取れる。これらは1970、80年代の民衆（労働）小説、さらに遡れば植民地下のプロレタリア小説とも共通の主題であり、「多文化小説」の中でも移住労働者を扱った作品は韓国の労働小説の系譜に連なるものだといえるだろう。

### 2-3. 「多文化小説」に描かれる／を描く北韓離脱民たち

結婚移住女性、移住労働者の他に、韓国には北朝鮮から韓国へ入国し定住する北韓離脱民（以下、離脱民と記す）が現在韓国内に3万人いるとされる。離脱民は、入国後に保護申請者に対する臨時保護措置が取られ、人道的な理由から保護、教育、就職、住居、医療、生活保護の支援、年金の特例を受けることができ、統一部長官、国家情報院長の管理する登録台帳によって管理される<sup>67</sup>。

離脱民を描いた長編の作品では、カン・ヨンスク（2006）『リナ』<sup>68</sup>、黄哲映<sup>フアンソギョソン</sup>（2007）『パリテギ』<sup>69</sup>があり、どちらも日本語に翻訳されている。『リ

<sup>63</sup> 김미월, 2009, 「중국어수업」 『한국문학』 겨울호:72.

<sup>64</sup> 이경, 2014, 전미세리, 역, 『Dust Star』, 도서출판 아시아:10.

<sup>65</sup> 作品内でははっきりと書かれてはいないが、正規の技術研修生あるいは雇用許可制に基づく労働者として合法的に入国しても、職場を離脱することで不法滞在となっていると考えられる。

<sup>66</sup> 이경, 2014, 전미세리, 역, 『Dust Star』, 도서출판 아시아:10.

<sup>67</sup> 吉川美華「国境を越えた人々と法——韓国政府の新たな統合戦略」『韓国・朝鮮の文化と社会』14（韓国・朝鮮文化研究会, 2015）p. 43.

<sup>68</sup> 강영숙 『리나』 랜덤하우스 2006〔日本語訳：吉川風（2011）『リナ』現代企画室〕

<sup>69</sup> 황석영 『바리데기』 창비 2007〔日本語訳：青柳裕子（2009）『パリテギ』岩波書店〕

ナ』は、北朝鮮を脱出した少女が、中国、東南アジアを経由して韓国にたどり着くまでの物語と読めるが、本文中に実在の国名は登場しておらず、リナが経験する過酷な体験のひとつひとつは極端で現実離れしたエピソードとなっている。『パリテギ』も主人公のパリがシャーマンであり特殊な能力を持っていることから、全体的に幻想的な長編となっている。

離脱民を現実的な筆致で描いた作品として全成太の「労働新聞」(『創作と批評』2009年夏号)<sup>70</sup>がある。作品の中ではセト民とも北韓離脱民とも呼ばれる人たちが住む高層団地で古紙回収を担当している老人たちは、北朝鮮の機関紙である労働新聞を発見する。老人たちが動揺するのは、その新聞からスパイの存在を連想するからである。団地に入居したばかりの離脱民の青年は、天井の警報器を監視カメラではないかと恐れ、両親と一緒に韓国に定住することになった中学生は、韓国の学生たちのスラングを単語カードに書いて一生懸命覚えようとしている。これらのエピソードからは、南北間の生活習慣の違いと、南に定住しようとする努力、また離脱民に対する韓国人たちの消しようのない猜疑心が読み取れる。

別の視点から離脱民を描くのが、中国朝鮮族の作家、キム・クムヒ<sup>71</sup>の「玉花」(『創作と批評』2014年春号)である。この作品は中国東北部に住む朝鮮族の女性ホンの視点で語られ、ホンの兄と結婚したが家族を捨てていなくなった玉花と、作中で「女」と呼ばれる二人の離脱民が登場する。教会に通う朝鮮族の人たちから、女は、言い訳が多く、働こうとせず、「人間として基本的な道徳や正直な良心などさえ、あるかどうか疑わしい<sup>72</sup>」恩知らずな存在として語られる。しかし、ホンは女と会話を交わすうちに、中国朝鮮族である自分たちが離脱民に対して持っている認識が先入観に過

ぎないことに気付く。ホンは、母親が玉花を連れてきた日の「デパートのセールに行って、ブランド品を安く買ってきたような興奮した声<sup>73</sup>」のなかに、玉花を人間としてではなく物のように扱う姿勢が表れていたことを思い出す。この作品は韓国の文芸誌『創作と批評』で発表されており、朝鮮語・韓国語文学の描く対象だけでなく、書き手と読み手の関係を考える点でも興味深い<sup>74</sup>。

離脱民と文学との新しい関係を示す一例として、2015年には韓国の作家と北朝鮮出身の作家たちが北韓離脱民をテーマに描いた小説のアンソロジー『国境を超える影<sup>75</sup>』が発表され、2017年には『越えてくる者、迎え入れる者——脱北作家・韓国作家共同小説集<sup>76</sup>』として日本でも出版されている。これは、北朝鮮問題に関心を持つ韓国の作家8人と、脱北して韓国に入国し現在韓国で創作している作家5人がそれぞれ脱北をテーマに描いた短編を編集したものである。離脱民の作家の背景は様々で、北朝鮮でも作家としての経歴がある者、中には北朝鮮での創作活動が反体制作品嫌疑で投獄された者も、韓国に入国してから創作を始めた者もいる。この事例から、離脱民が描かれる対象としてだけ存在するのではなく、自ら描く主体への変換が始まっていると言える。

#### 2-4. エスニックマイノリティとしての朝鮮族

ここまで労働者と結婚移住女性、北韓離脱民に大きく分類して現状を検討してきたが、中国およびCIS出身の朝鮮族は、労働者として入国するケースと結婚により入国するケースがどちらも認められる。韓国は他国の国民である外国籍同胞も在外同胞に含めるが、旧ソ連地域と中国出身の在外同胞に関してはその権利が限定されており、「外国人と同胞のはざまで不安定な立場<sup>77</sup>」だと言える。実際に訪問就業ビザで就業できる職種は、韓国で

<sup>70</sup> 전성태 「로동신문」 창작과 비평 2009년 여름호

<sup>71</sup> 김금희 「옥화」 『창작과 비평』 2014년 봄호

2015年の単行本『세상에 없는 나의 집 [この世にない私の家]』が創作と批評社から刊行された際に、著者の名前はキム・クムヒからクムヒに統一されている。中国で発表されたこの作品が、ほぼ同じテキストで韓国で発表できるという点にも、同じ言語を使う朝鮮族と韓国社会との関係が現れており興味深い。

<sup>72</sup> 「옥화」 p.223 単行本『세상의 없는 나의 집』

(2015) 창비

<sup>73</sup> 同上, p. 225.

<sup>74</sup> 韓国で発表された作品として、ここでは韓国文学として論じる。

<sup>75</sup> 윤후명, 윤강일, 이청해, 이지명, 이청재, 도명학, 이성아, 설송아, 정길연, 김정애, 방민호, 이은철, 신주희, 2015, 『국경을 넘는 그림자』 예옥출판사

<sup>76</sup> ト・ミョンハク他著, 和田とも美訳, 2017, 『越えてくる者、迎え入れる者——脱北作家・韓国作家共同小説集』アジアプレス・インターナショナル出版部

<sup>77</sup> 吉川美華, 2015, 「国境を越えた人々と法——韓国政府

忌避されている単純労働に制限されている。吉川美華は中国朝鮮族に対して韓国社会が持つイメージを「中国同胞はもともと朝鮮語（韓国語）の能力と朝鮮文化を保持しており、同一民族ではあるものの、韓国への入国者が急増するにつれ韓国社会にかねてあった冷戦期の共産主義国家に対する貧困のイメージや、偽装結婚や偽装旅券による不法入国や不法滞在者、不法労働者といったイメージがメディアを通じて浮上し、定着していった」と分析している<sup>78</sup>。また、李守は「1984年11月、『韓中間離散家族再会処理規定』（訓令164号）を制定し、中国朝鮮族が親戚訪問するにあたって、6か月の在留を認める臨時旅行証明書を発給して、かれらの韓国訪問に便宜をはかり、中国政府もそれを承認した。（……）親戚訪問の旅行証明書は原則的に就業を認めていないにもかかわらず、長期間就労したあげく、在留が非合法化していく事例がふえていた<sup>79</sup>」ことを報告している。「朝鮮族」というエスニック集団に対するある一定のイメージは小説の中にも再現されている。

「ごめんなさい、ホーおじさん」に出てくる友人のオイギも、「血筋」に出てくる話者の息子も、外国人花嫁探しが一番最初の相手として中国の朝鮮族が出てくるが、前者は逃げられ、後者は騙され、どちらも失敗に終わっている。また、『さよなら、サーカス』では、中国出身の朝鮮族であるリム・ヘファは夫の虐待からパスポートも持たず逃げ出す。リム・ヘファの行方を捜しているうちにインホは同じ時に嫁さがしのために中国旅行をした男性も若い嫁に逃げられてことを知る。パスポートがないことで彼女の身分を保証するものはなくなり、帰国することも困難になるが、家を飛び出した彼女を助けてくれるのは、同じように結婚によって移住した後で婚家を飛び出した朝鮮族の女性だ。女性の助けを得て不法滞在の身分で働いていたリム・ヘファは、流産から体を壊して働けなくなるとソウル市の西南部に実在するカリボン洞の朝鮮族コミュニティに入る。韓国人社会から完全に分離され、切り離される。リム・ヘファは怪しい薬物

を売ることによって生計を立て、最後には薬物中毒で朦朧とするところで終わる。

パク・チャンスンの「カリボン羊串」（『朝鮮日報』2006年新春文芸<sup>80</sup>）は、中国出身の朝鮮族の主人公が朝鮮族の集住地であるカリボン洞で、朝鮮族の料理である羊の串焼きを韓国人の口に合うように改善しようと試行錯誤する。彼の夢は、韓国で成功して故郷に渤海式の庭園を造ることである。古代に朝鮮半島から中国東北部にかけて存在したとされる渤海は、中国出身の自分と韓国とのルーツを結びつける象徴である。韓国と朝鮮族の文化を融合させる夢が実現しそうになるが、同じ朝鮮人コミュニティのやくざに殺される。これも、朝鮮族のコミュニティを犯罪と結びつける韓国社会のイメージを反映していると言えるだろう。

吉川らの報告に見られるように、中国の朝鮮族出身者は言葉ができるために結婚で韓国に来てから逃げ出す事例は多く、それは小説作品にも反映されている。結婚によって韓国に入国した女性は多くの場合離婚によって不法滞在となり、公的な支援から切り離される。すでにソウルには朝鮮族のコミュニティが出来上がっているが、吉川美華と李守が指摘する通り、朝鮮族全体に対して、不法滞在や薬物売買などのマイナスイメージがもたれており、「多文化小説」に描かれる朝鮮族の姿には、韓国社会が彼らに描く犯罪や不法滞在といったマイナスイメージが反映されている。しかし一方でエスニックマイノリティとしての連帯もまた描かれている。

## おわりに

本稿では2000年以降に韓国に流入した移住者たちを主題とした作品群が「多文化小説」と呼ばれ、研究対象となったことを確認した。チェ・ナムゴンの定義に従えば「多文化小説」というジャンルは「韓国に新たな構成員として流入してきた移住労働者、結婚移住女性、脱北者、混血者、留学生、専門職員など、定住民に対応する移住民を対象として、韓国を叙事空間に設定して再現する」、ある

の新たな統合戦略』『韓国・朝鮮の文化と社会』14:47.

<sup>78</sup> 吉川美華, 2015, 「韓国における出入国管理法関連法令の改正と移民外国人の在留資格 — 中国・CSI同胞と結婚移民者を中心に —」『アジア文化研究所研究年報』50:

119.

<sup>79</sup> 李守, 2013, 「中国朝鮮族が試金石となる韓国の多文化主義」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』19:48-49.

<sup>80</sup> 박찬순, 2006, 「갈리봉 양꼬치」 조선일보 신춘문예

いは「韓国外の空間で移住者として生きていく韓国人を形象化した叙事文学を総称する」のどちらも指す言葉ではあるが、これまでの「多文化小説」研究は前者だけに偏っており、後者の「韓国外に居住する韓国人」を主題とした作品は「多文化小説」として研究されていない。

韓国における国境を越えた人々の移動の歴史を考えると、移民送出国から移民受け入れ国へという流れは、そのまま「韓国外に居住する韓国人」を描く文学から「韓国内に居住する移住民」への流れに対応する。「多文化小説」研究においては、「韓国外に居住する韓国人」を描く作品の研究も必要であろう。

また、これまで「多文化小説」は韓国内でのみ研究され、「韓国人」「韓国」というものが自明のように語られているが、この場合の「韓国人」「韓国」がどのように定義されているかも検討が必要だと考える。

従来の個々の作品研究と合わせてこの二つの課題を明確にすることで、2000年代韓国における「多文化小説」の意義を考えることができるだろう。